



留学生受け入れプログラムの開発

広島なぎさ中学校・高等学校
国際教育部長 ジョン・ハンビー



留学生受け入れプログラムと目的

2010年4月、本校の教育4目標の一つである「国際性の涵養」を一層促進すべく、新たな校務分掌として国際教育部が創設されました。

これまで本校には、語学研修や研修旅行など出かけるプログラムは多くあったものの、受け入れるものは中2のニューゼalandとの交換留学のみでした。

受け入れる目的は、いまでもなく、異文化理解の促進とともに、生徒が今日の世界で必要とされる国際的視野と考え方を身につけ、最終的には国と文化を結ぶ「橋」となるようにすることです。

さらに、願わくは、外国の文化、言語、歴史だけでなく、他の国々の抱える課題や国際貢献を理解することを通して、リーダーとなる資質を育成することを目指しています。

CGS校

10月に訪米し、我々と考えを共有できかつ特徴のある相手校を訪れ、2月に受け入れをするという過密なスケジュールの中で、受け入れプログラムを開発しました。

その相手校とは、CGS(Center for Global Studies)という高校で、グローバルスタディヤ、アラビア語、中国語、日本語や文化を学習することに特化したカリキュラムを持つ米国のコネチカット州にある高校です。

2月、本校はCGSに通う民族的にもバラエティに富む8名(男子5名、女子3名)の生徒を受け入れました。全員、日本を訪問した経験があり、最初の目的は、大都市(東京など)を訪れ、日本の人々と

交流し日本に対する理解や日本語を向上させることだったそうです。

2度目の訪問となる今回の本校への目的は、東京と広島の違い(都市と地方都市の地理的差異、生活スタイル、歴史的影響による違いなど)、また「広島人」とはどういうアイデンティティを持つ人間なのかを知ることであったとのことでした。

こういった意図を持った留学生に伝えるべく、「広島人」を理解してもらうよう努めた本校生徒にとっては、自分たちについても改めて見つめ直すなど考える良い機会となりました。自分自身について、特に文化の異なる他者との関わりの中で考える機会となったことは短期的にも長期的にも生徒にとっては非常に価値のあることでした。

プログラムの準備

以下の4点をどのようにクリアするかが、この2週間のプログラムの成否を握っていました。

- ・受入れホストファミリーの確保
- ・留学生の通常授業への参加のバランス
- ・校外プログラム～エクスカージョンの企画
- ・交流会の企画

ホストファミリー

年度当初に予定されてなく、しかもきわめて限られた時間の中で、ホストファミリーを確保することができるかは正直、不安はありましたが、留学生を受け入れる価値を理解していただいた多くのご家庭から応募をいただきました。

実際、日本語を懸命に学ぼうとするCGS留学生の姿勢などから刺激を受けられるなど、ホストファミリーにとっても大きな学びとなったようでした。



本校での授業

2週間の滞在中、留学生は国語や化学など多くの授業に参加し、本校生徒は授業を通じた交流の機会を持つことができました。

体育と数学の授業の例を挙げてみましょう。

体育の授業では、縄跳びが行われており、留学生も縄跳びに挑戦しました。留学生は本校生徒が取り組む高度な技に圧倒されていました。最初は恥ずかしがっていた本校生徒も、時間が経つにつれて留学生に縄跳びの技を教えようと、英語と日本語、そして身振り手振りで見本を見せながらコミュニケーションをする様子はとても自然で、美しい光景でした。

高2の数学の授業は、当初、留学生のための特別なプログラムを行ったわけではない通常の授業でした。しかし、本校生徒は留学生の存在に大いに興味を示していました。留学生がアメリカの数学の授業で実際に学習しているこ

とを尋ねられると、彼は積分の問題を日本語で書き、それを教員が本校生徒に説明しました。

次の数学の授業では、留学生が本校生徒にアメリカでのやり方を教え、本校生徒は英語だけでなく数学にも挑戦しました。生徒たちはこの授業に熱心に興味を持って取り組んでいました。

エクスカージョン～平和公園

本校生徒と留学生は、蒲刈、ウッドエッグ、平和公園など県内のいくつかの場所を訪問しましたが、特に平和公園は留学生に深い感慨を与えました。

平和公園訪問前には、留学生と本校生徒は、広島と原爆投下についてのディスカッションを行いました。その際、既に進学先が決まっていた高3生が、「貞子」の話をしました。留学生は心を打たれていました。

後に両者で白熱した議論が行われたことにより、平和公園の訪問がさらに価値あるものとなりました。

留学生は、原爆資料館に入館する前に、ガイド役の本校生徒から平和公園内の記念碑などについて説明を受けました。そのおかげで、留学生たちは資料館内では厳粛な気持ちで、説明を全て読み、資料館を見学しました。見学後、あまりの衝撃に、留学生は何も言うことができない状態でした。

一人の留学生が後にこのようなコメントを寄せています。

「アメリカではパールハーバーや広島と長崎の原爆投下については学習するが、実際に被害を受けた現地を訪れるほうがよくわかる。自分がショックを受

けたのは、歴史の教科書の数字や統計を見るだけではわからない、実際に被害を受けているのは人間であるということだった。例えば、弁当箱、制服、作業靴などが私達の目に焼きついた。わたしたちのような普通の人間がたったひとつの閃光のために全ての物を、愛する全ての人を失うとは。このように人命を無視するという酷い行いは一つの国、合衆国だけで決めるべきことではなかった、世界の他の国家とともに考えて慎重に行うべきことである。」

本校生徒は留学生に広島と原爆の与えた恐怖を知ってもらいたかったので、大きな達成感を味わうことができました。また、本校生徒は資料館の展示を見る間、留学生の質問に答え、資料館を出る頃には驚くほどの多くの質問を受けていました。本校生徒の一人は次のように驚きました。「アメリカの生徒はどうしてこんなに熱心に質問するのだろうか、すぐに自分の意見が言えるのはなぜだろうか、私にはとても考えられない、とてもできないことだ。」

交流会

最終日に、本校生徒と留学生の交流会を行いました。会場としたCルームという大型教室が、中学生高校生で満杯となる大盛況でした。

留学生は広島と日本についての感想を述べるとともに、パソコンを使って学校生活、

お好み焼き、広島、ホストファミリーや日本とアメリカの違いや似ているところを日本語で発表しました。

最初、お互いにややはにかむ場面があったものの、交流会は質疑応答や楽しいゲームなどの活動を行って幕を閉じました。

本校生徒の感想は、留学生と可能な限り、もっと時間をすごしたかったという大変充実したものばかりでした。

最後に

いまでもなく、留学生と触れあうことで、本校生徒は留学生という他者の目を通して自分たちの生活をみることができます。そして、知識を得、責任感と自信を持ち、能力を高め、自立心を持つことにつながります。

そういった意味で、限られた日程ではあるものの、可能な限り両者の交流の機会を増やすことなど、まだまだ改善すべき課題があるプログラムではあります。

とはいえ、今年はじめたこのプログラムがもたらした恩恵は計り知れないものがあると、実感しています。

